

# 古代金工における色彩

——古代の色は復元可能か——

村上 隆

- 
- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 1. はじめに            | 5. わが国古代金工における金と銀     |
| 2. 多彩な色を持つ銅合金      | 6. 近世金工技法から古代金工の色を考える |
| 3. さびに隠べいされた銅合金の素顔 | 7. ま と め              |
| 4. 出土遺物に探る古代銅合金の彩り |                       |
- 

## 論文要旨

人類が初めて出会った金属は、おそらく天然に存在する金か銅、いわゆる自然金、自然銅であったに違いない。それぞれ独特の色を持ち、これが人目を引いたためであろう。やがて、鉱石から精錬によって金属を取り出すことを習得した人類は、金属を混ぜ合わせて合金を作ると、その配合比によって強度などの性質を調整できることを学んでゆく。特に、銅は、混ぜ合わせる金属によって、性質とともに色も大きく変化する特徴を持つ。古代における銅合金の配合比調整には、この色の変化が大いに利用された、と考えられる。

考古学の発掘調査が盛んになるに伴い、われわれは実に多くの古代の銅製金工品に出会うことができるようになった。しかし、その大半は表面を緑青色のさびに覆われ、オリジナルな色を残しているものは皆無といっても過言ではない。さびによって、多彩な銅合金の素顔が隠べいされてしまっているのである。従って、これまでの銅製金工品の調査・研究も、形態による形式的研究が主であり、「色彩」からのアプローチはほとんどなかった。本稿では、古代から用いられてきた銅合金の材質と色との関係を中心に、古代金工品がオリジナルに持っていた色彩を探り、古代人が味わっていた色の世界をわれわれ現代人が共有でき得るのか、を論じる。

わが国における近世期の金工技法では、多彩な色付けの技法が高度に発達している。これら一連の技法も、古代からの金工技法の発展の流れの中から生まれてきたものと考え、逆に古代金工品の色付け技法を探るために何らかの知見を与えてくれるものと見なせる。本稿で併わせて論じたのはこのためである。

今後とも、「材質と色との関係」という材料科学的な観点から、古代金工品を考察することによって、これまで見落としがちになっていた古代金工における色の世界に少しでも迫っていきたい、と考えている。